

## ◆特集 「沖縄『復帰』50年」を問う

# わが故郷の祖国復帰50周年によせて

沖縄、50年前の祖国復帰

50年前の5月15日、沖縄の施政権が日本政府に返還され、アメリカの統治下にあった故郷が祖国復帰を果たしました。

当時私は小学校5年生でしたが、祖国復帰を勝ち取った大人たちの顔は、輝きに満ち溢れていました。子ども心に、素晴らしい未来の来訪を期待していました。

しかし当時は、1ドル360円の時代でしたから、ドルから円に切り替えただけで大損というダメージが、まず待ち受けていました。学童保育も無い時代でしたので、毎日母が、菓子パン代として5セントを渡してくれたのですが、せいぜい20円となるはずだった菓子パンは、一気に45円に値上がりしました。物価を本土並みに揃えないと、流通できないためでした。なんて理不尽な！

復帰しても何も変わらない

アメリカの世からヤマトの世に代わっても、何も良いことは無いではないか！・・・と、小学生ながらに憤慨したものです。

物心ついた時には既に、沖縄にはアメリカという言葉の通じない魔物、則ち、エイリアンが存在していて、そいつらに従わなければならないルールがあるらしいということだけは、何となくわかりました。

当時、南北を繋ぐ幹線道路はたった2本しかなかったため、米軍が基地ゲート前で検問を始める夕方以降は、ちよくちよく大渋滞となりました。基地ゲート前になると、迷彩服を着たつかい白鬼や黒鬼（幼い私にはそう見えた）が、通過車両の中を懐中電灯で照らしては、一人ひとりの顔を確認した後、英語で質問してくるのです。今から思えば、「ドライバーズライセンス、プリーズ？」といった単純な英会話でしかなかったとは思いま

東京都日野市 市議会議員

奥野りん子

すが、父が少しでも狼狽<sup>うた</sup>えたりすると、チム（心）どんどん（ドキドキ）したものです。

## 私の育ったコザ市

私の育ったコザ市（現沖縄市）は基地の町でしたから、米兵は街中にウジャウジャいました。キャンプコザに隣接するコザ小学校は、米兵相手の歓楽街が通学路になっていて、道の両側には、白人ダンサーのヌード写真がベタバタと貼られてありました。

当時そのコザ小学校の教師をしていたうちの母は、「貧しい家庭の子ほど、誰よりも先にその道を通りたくて、早起きをする」と言っていました。米兵が、見送る女性たちが目掛けて帰り際にバラまいたチップが、そこら中に落ちていたからだそうです。

また、我が家の正面にあるお宅が、ある日突然、空き部屋を貸し出したと思いきや、借りたのは米兵で、囲われたのは沖縄女性ということもありました。驚くべきことに、朝鮮戦争当時の1950年代には、人口5〜6万人程度のコザ市に、5000人もの娼婦がいたそうです。

米軍にとって不都合な情報は全く公開されませんで

したが、振り返ってみれば、こうした屈辱的な現実も、子どもの目に入る風景の中に当たり前のように存在し、しつかりと写り込んでいたことに気づかされます。

## 少女時代の生活

当時は学童クラブも無く、私たち兄弟3人は、母が帰宅する日暮れまで野放し状態でした。不安に思った母が思いついたことは、女の子である私を男子に見せかける事でした。

「床屋さんに行くよ」と言われると、途端に悲しくなり、バリカンで刈り上げられ、坊ちゃん刈りになった自分の姿を見ては、帰宅後に布団を被って泣く・・・これを繰り返す少女時代でした。

しかし、私を虐待した張本人は、「日米安保条約」以外の何物でもありません。子育てに苦勞しながらも、教職員組合の復帰運動の隊列にも加わり、精一杯頑張ってきた両親には、感謝と尊敬の念しかありません。

私自身は、本土復帰を原点到政治に向き合うようになりましたが、戦争を体験した親世代は、それこそ、地獄を味わってきたわけです。ていんさぐの花の紅を爪に染めるように、先達の熱き反戦の思いを、何度でもチムに

## ◆特集 「沖縄『復帰』50年」を問う

染め直さねばと思います。

### 沖縄戦での家族の実態

沖縄戦においては、父の長兄は南方に向かう船ごと沈められ、体の弱かった次兄は長崎の軍需工場に徴用されて被ばく。二人の幼女を残して、帰郷後に白血病で死亡しました。伯父（父の次姉の夫）は、日本軍からヤンバルの集落を守るよう命じられ、少年兵として銃を取りました。

母方の方はと言うと、母の長姉は、学童疎開船・対馬丸の撃沈によって、3人の子を亡くしています。また、ひめゆり部隊の生き証人として語り部活動に取り組みれた故宮城瑠璃さんは、兄嫁の母にあたります。私の身内だけでも、これだけの人間が犠牲となっているのです。

### 沖縄戦とロシアのウクライナ侵攻を重ねて

あんな小さな島で、鉄の暴風が吹き荒れたわけですが、当時の沖縄戦さながらに、ウクライナが今、ロシアからの無差別攻撃に直面しています。ロシアのウクライナ侵攻は、どんな理由があれ、絶対に許されるものでは

ありません。

日本の歴史を振り返ってみても、昭和天皇は、やみくもに戦争を始め、拡大していったわけですが、その終結の仕方だけでも間違えが無ければ、沖縄が焦土と化し、広島と長崎に原爆が投下されることもありませんでした。

プーチンの暴走は、迷走へと変わり始めていますが、一刻も早く食い止めねば、一体、どれだけの犠牲者を生んでしまう事か。

手段を選ばない冷酷さをもって、やみくもに突き進むプーチンの野望を、世界が一丸となって打ち砕く共闘を望みます。

ロシアとウクライナの関係は、日本政府と沖縄県の関係によく似ています。誰かの利益が誰かの犠牲の上になり立つという時代は、一刻も早く終わらせて参りましょう。

### 祖国と世界平和のために

日本国憲法と祖国復帰運動の原点に立ち返って、祖国と世界の平和のために、皆さんと力を合わせたいと思います。



「離島奪還」日米共同軍事演習

沖縄では、1945年の6月23日に日本軍による地上戦が終結。その7年後にサンフランシスコ条約が発効。本土は、日本の独立に浮かれましたが、その一方で、その本土から切り離された沖縄は泣かされました。祖国復帰という悲願は、それから20年後の5月15日に果たされたのです。

## 過去から現在に至る沖縄の抱える問題

数々の問題を残したまま返還されたあの日から、50年が経った今現在においても、沖縄が抱える問題は何か

変わっていません。変わっていないどころか、益々、捨て石にされているではありませんか。

今、沖縄本島を始めとして、奄美大島や宮古島、石垣島には、台湾有事に備えて自衛隊のミサイル部隊が大量配備され、日米共同訓練が、南西諸島全体で強化されています。

いざ台湾有事が発生したら、沖縄は、中国にとつての最大の攻撃目標となるわけですから、域内に住む150万人を超える住民が標的となります。「犠牲となるリスクを抱えた」と言っても過言ではありません。

## 戦争の火種を無くそう

中国の軍拡を口実として、「敵基地攻撃能力の保有」や「憲法9条改悪」が叫ばれています。ウクライナ情勢を前面に押し出す事によって、その声はますます声高になってきています。

復帰50周年を機に、敵よりもさらに声高に叫ぼうではありませんか。二度と戦争はしないと誓った日本国憲法の下に結集しよう！ 横に繋がりが合うことで戦争の火種を無くそう！

(おくの りんこ)